

★『芸術の言語』刊行記念フェア★

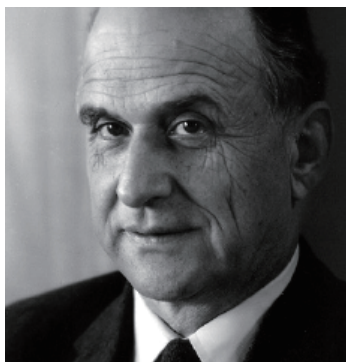
グッドマン★
リターンズ
→ GOODMAN RETURNS
新しい古典がやってくる!

[最強のブックフェアリスト]

企画★慶應義塾大学出版会 協力★勁草書房

2017.5

ネルソン・グッドマンとは何者か？



ネルソン・グッドマン
(Nelson Goodman)

1906～1998年。アメリカの哲学者。美学、論理学、認識論、科学哲学において多大な影響を及ぼした。画廊を経営するかたわら、ハーヴァード大学で博士号を取得。ハーヴァード大学哲学名誉教授。タフツ大学、ペンシルヴェニア大学、ブランダイス大学、ハーヴァード大学など、各地で教鞭をとる。ハーヴァード大学では、哲学、認知科学、芸術、教育を融合させることを目的とした研究機関「プロジェクト・ゼロ」を設立。おもな著書に、『事実・虚構・予言 (Fact, Fiction, and Forecast)』（雨宮民雄訳、勁草書房、1997年）、『記号主義——哲学の新たな構想 (Reconceptions in Philosophy and Other Arts and Sciences)』（エルギンとの共著、菅野盾樹訳、みすず書房、2001年）、『世界制作の方法 (Ways of Worldmaking)』（菅野盾樹訳、ちくま学芸文庫、2008年）など。

『芸術の言語』

ネルソン・グッドマン [著]
戸澤義夫・松永伸司 [訳]

ISBN978-4-7664-2224-5 四六判／上製／352頁 ◎4,600円（税抜）



芸術を〈記号システム〉として解読し、
記号の一般理論を構築する。
絵画、音楽、ダンス、文学、建築
……芸術へのアプローチを根本的に
転換した20世紀美学の最重要著作
がついに邦訳。

【主要目次】

第一章 現実の再制作

- 1 指示／2 模倣／3 遠近法／4 彫刻／5 フィクション／6 トシテ再現／7 創意
- 8 写実性／9 記述と描写

第二章 絵の響き

- 1 対象領域の違い／2 方向のちがい／3 例示／4 サンプルとラベル／5 事実と比喩／6 図式
- 7 転移／8 隠喩の諸方式／9 表現

第三章 芸術と真正性

- 1 完璧な贋作／2 答え／3 贋作不可能なもの／4 理由／5 課題

第四章 記譜法の理論

- 1 記譜法の主機能／2 統語論的要件／3 符号の合成／4 準拠／5 意味論的要件／6 記譜法
- 7 時計と計数器／8 アナログとデジタル／9 帰納的な翻訳／10 図表、地図、モデル

第五章 譜、スケッチ、書

- 1 譜／2 音楽／3 スケッチ／4 絵画／5 書／6 投射可能性、同義性、分析性／7 文学
- 8 ダンス／9 建築

第六章 芸術と理解

- 1 絵と文／2 調べることと見せること／3 行為と態度／4 感情の機能／5 美的なものの徴候
- 6 価値の問題／7 芸術と理解

一度古びたとしてもまた息を吹き返す文献を「古典」と呼ぶなら、ネルソン・グッドマンの『芸術の言語』はまちがいでなく古典です。半世紀まえに出版されたこの本は、他のすべての古典的な哲学書と同じように、汲み尽くせないような豊かな洞察によって、美学とその関連領域において新たな視点と使い道を提供しつづけています。

『芸術の言語』が古典であるゆえんは、少なくとも3つ挙げられます。第一に、それまであやしげなかたちで論じられていた美学的な諸問題を、明晰で地に足のついた枠組みで説明したこと。たとえば、再現における「類似」、表現における「感情」、美的なものにおける「いわく言い難さ」「直接性」といった従来とうさんくさい説明概念にかわって、記号の働きとそのシステムのあり方という曖昧さのない説明図式が持ち込まれます。

第二に、それまでは十分に定式化されていなかった論点を新たに切り開き、その後の議論の文脈を作り上げたこと。たとえば、贋作問題や再現の本性に関する諸論点は、その後の分析美学において「芸術作品の存在論」や「描写の哲学」と呼ばれることになる豊かな議論の端緒となるものです。

第三に、射程の広さ。『芸術の言語』には、再現、表現、隠喩、美的なものといった美学的な問題だけではなく、記号や知覚や認識一般についての重要な洞察も含まれています。また、芸術形式ごとの特徴づけとその比較は、個別芸術学である文学や音楽学や美術史学にとって有益な知見を与えるものです。この本がさまざまな分野で認知され参照されているのは、そうした論点の幅広さのおかげでしょう。

このブックフェアは、こうした『芸術の言語』の古典としての魅力を、現代の読者の口にあうように5つの切り口で料理したものです。選書者としては、主に2015年に好評を博したブックフェア「分析美学は加速する」のメンバーが参加していますが、今回は分析美学にとどまらない視点から多様な分野の文献が紹介されています。

このブックフェアが、グッドマンをより深く読むための、またグッドマンから考えを広げるための一助になれば幸いです。

★ブックフェアの基礎文献

1. 『事実・虚構・予言』

ネルソン・グッドマン [著] / 雨宮民雄 [訳] 4,000円 勁草書房 1987年

2. 『世界制作の方法』

ネルソン・グッドマン [著] / 菅野盾樹 [訳] 1,300円 ちくま学芸文庫 2008年

3. 『記号主義』

N. グッドマン、C. Z. エルギン [著] / 菅野盾樹 [訳] 4,200円 みすず書房 2001年

4. 『分析美学入門』

ロバート・ステッカー [著] / 森功次 [訳] 5,700円 勁草書房 2013年

5. 『分析美学基本論文集』

西村清和 [編・監訳] 4,800円 勁草書房 2015年

松永伸司 (まつなが・しんじ)

東京藝術大学美術学部教育研究助手/立命館大学ゲーム研究センター客員研究員。
博士(美術)。訳書にネルソン・グッドマン『芸術の言語』(共訳、慶應義塾大学出版
会、2017年)、イエスパー・ユール『ハーフリアル』(ニューゲームズオーダー、2016年)、
モリス・ワイツ「美学における理論の役割」(『フィルカル』1巻2号、2016年)。

1. 芸術と記号の理論

松永伸司

グッドマンが『芸術の言語』の序論で書いているように、「芸術の言語」の「言語」は記号システムつまり記号が働く枠組みのことです。芸術を記号の観点から考える伝統はグッドマン以前からあります。というより、『芸術の言語』の初版が出版された1968年当時すでに十分に手垢のついたアプローチだったと言っていいでしょう。たとえば、20世紀中頃のアメリカ美学のひとつのスタンダードであったスザンヌ・ランガーの芸術理論は、明白に記号論的なものです。ソシュールに端を発する構造主義的な記号学が、ヤコブソンやロラン・バルトといった人々によって芸術を論じるための理論として積極的に利用されはじめたのも、同じく20世紀の前年から半ばにかけてです。

記号美学の一般的な特徴は、感情や快や態度や趣味や判断というより、「意味」とそれを表す「記号」とその働きの観点から芸術と美的なものを考えるアプローチです。この点では『芸術の言語』も変わりませんが、他の記号美学と並べてみることで、その問題意識とオリジナリティがよりはっきりするでしょう。たとえば、グッドマンの「例示」の概念は「理念の感性的な表現」や「内在的な意味」のような芸術の伝統的な特徴づけを新しい切り口でとらえたものと見ることができますし、「表示の連鎖」の考えはバルトの「コンテション」やパノフスキーの美術理論における意味の複層性を包括できるものです。

このセクションでは、古典的な記号美学に関わる文献に加えて、記号論に代わる現代の理論的枠組み（言語哲学や心の哲学やコミュニケーションの理論）の概説書もいくつかピックアップしました。美学の領域にかぎらず、「記号」はいまやかなりレトロな響きをまとう言葉になっています（「芸術形式／芸術のメディア」のセクションも参照）。とはいえ、記号論的なアプローチが取り上げていた論点は、いまでも重要な示唆を与えてくれるものです。その古めかしい議論は、現代のより洗練された道具立てによって今風の格好に仕立てなおされるのを待っているかもしれません。

★【芸術と記号の理論】の参考文献

6. 『芸術とは何か』 ※品切

S.K.ランガー [著] / 池上保太・矢野萬里 [訳] 480円 岩波新書 1967年

言及こそほとんどないものの、『芸術の言語』は明らかにスザンヌ・ランガーの芸術哲学を直接の批判対象のひとつにしている。本書はランガーの主著『シンボルの哲学』『感情と形式』で展開された記号美学のエッセンスを一般向けにわかりやすく書き下した講演録。

7. 『芸術の記号論』

加藤茂ほか [著] 2,800円 勁草書房 1983年

記号論と記号美学の全体像を把握するための格好の入門書。パース、モリス、カッシーラー、ランガー、ソシュール、バルト、ムカジョフスキーから、イコノロジー、現代修辞学、物語論、映画記号論まで。

8. 『記号論Ⅰ』 ※品切

ウンベルト・エーコ [著] / 池上嘉彦 [訳] 1,100円 講談社学術文庫 2013年

9. 『記号論Ⅱ』

ウンベルト・エーコ [著] / 池上嘉彦 [訳] 1,350円 講談社学術文庫 2013年

ソシュール系の枠組みとパース系の枠組みを統合して体系化した記号論の理論書の金字塔。『芸術の言語』で使われている理論概念の多くは、本書に対応物を見いだせる。第2巻には、類像記号 (icon) や芸術作品やレトリックといった美学的な論点についてのまとまった議論がある。

10. 『モードの体系』

ロラン・バルト [著] / 佐藤信夫 [訳] 7,400円 みすず書房 1988年

11. 『神話作用』

ロラン・バルト [著] / 篠沢秀夫 [訳] 2,400円 現代思潮新社 1967年

バルトがソシュールの枠組みを使って作り上げたもののひとつは、ある意味の動き自体がさらに別のことを意味する記号になるという理論だった。この「コノテーション」の理論が具体的に適用されたファッションや「神話」についての議論は、記号論的な批評のひとつの到達点を示している。

12. 『On Images : Their Structure and Content』

John Kulvicki [著] 5,559円 Oxford University Press 2009年

グッドマンの再現の理論は、その後の分析美学の描写の哲学のなかで少なからずダメ出しされ、「記号の一種としての絵」という観点も過去のものになっていた。その観点とエッセンスを洗練されたかたちで復活させたのがジョン・カルヴィッキだ。「グッドマン・リターンズ」を地で行く現代英語圏美学の新しい流れ。

13. 『哲学入門』

戸田山和久 [著] 1,000円 ちくま新書 2014年

現代の自然科学と一見相性が悪いように見える伝統的な哲学の諸問題を自然主義の立場からとらえなおす。「意味」「記号」「表象」「志向性」といった概念の今風の取り扱いが手軽に把握できる好著。

14. 『記号理論の基礎』

Ch.W.モリス [著] / 内田種臣・小林昭世 [訳] 2,400円 勁草書房 1988年

15. 『講座＝美学新思潮3 芸術記号論』 ※品切

竹内敏雄 [編] 520円 美術出版社 1966年

16. 『象徴の美学』

小田部胤久 [著] 7,800円 東京大学出版会 1995年

★【芸術と記号の理論】の参考文献(つづき)

17. 『新訳 ソシユール一般言語学講義』

フェルディナン・ド・ソシユール [著] / 町田健 [訳] 3,500円 研究社 2016年

18. 『一般言語学』 ※品切

ロマン・ヤークブソン [著] / 川本茂雄 [監修] 5,400円 みすず書房 1987年

19. 『記号論への招待』

池上嘉彦 [著] 800円 岩波新書 1984年

20. 『イコノロジー研究 上』

エルヴィン・パノフスキー [著] / 浅野徹ほか [訳] 1,300円 ちくま学芸文庫 2002年

21. 『イコノロジー』

W. J. T. ミッチェル [著] / 鈴木聡・藤巻明 [訳] 4,200円 勁草書房 1992年

22. 『イメージの修辞学』 ※品切

西村清和 [著] 5,500円 三元社 2009年

23. 『言語哲学』

W. G. ライカン [著] / 荒磯敏文ほか [訳] 3,600円 勁草書房 2005年

24. 『アメリカ言語哲学入門』 ※品切

富田恭彦 [著] 1,200円 ちくま学芸文庫 2007年

25. 『言語はなぜ哲学の問題になるのか』

イアン・ハッキング [著] / 伊藤邦武 [訳] 3,400円 勁草書房 1989年

26. 『コミュニケーションの哲学入門』

柏端達也 [著] 700円 慶應義塾大学出版会 2016年

2. 芸術作品の真正性

岩切啓人

絵画作品の贋作は存在するのに、音楽作品の贋作はあまり耳にしません。グッドマンは、この事実を芸術形式の記号システムの違いという点から解明しようと思いました。『芸術の言語』によれば、絵画、彫刻、版画などは、その作者によって作られたという事実によって同一性が決定される一方で、音楽、文学、ダンスなどは、その構造だけで同一性が決定される。このような、どのような条件のもとでなら芸術作品が本物なのかという問題は、「真正性 (authenticity)」の問題と呼ばれており、グッドマンはこの領域で常に参照・批判される先駆者です。

たとえば、グッドマンに反して、分子レベルで同一の絵画の複製は、同じ作品であると考えられることもあります。また、グッドマンは音があっている演奏がすべて同じ作品の演奏であると考えますが、ここでは楽器のことなどは考慮されていません。一方で、直観的には、音楽作品であっても作者の意図を踏まえ、指定された楽器で演奏するほうが良いように思われます。このような問題だけでなく、真正性は、美的経験から批評実践にまで深い根を張っています。たとえば、グッドマンは、まったく見分けがつかない二つの絵画が目の前にあっても、「本当はこちらが本物である」という知識があれば、二つの絵画は美的に異なって見えてくると主張しています。これは、見た目が同じという前提すら打ち破るような奇天烈な主張に思われます。このように、数多くの批判を浴びてきたグッドマンの議論ですが、芸術形式ごとに真正性の条件も異なるという主張は、それぞれの芸術実践を尊重するものであり、多くの研究に道筋を示したものでもあります。

このセクションでは、芸術作品の真正性について考えるきっかけを与える書籍を紹介します。上記のもの以外にも、盗作、アプロプリエーション、修復など、真正性は多様な舞台で問題になります。真正性について考えるときには、『芸術の言語』はともに考えたり、議論の相手になったりしてくれることでしょう。

★【芸術作品の真正性】の参考文献

27. 『フェルメールになれなかった男』

フランク・ウイン [著] / 小林頼子・池田みゆき [訳] 1,000円 ちくま文庫 2014年

不遇な芸術家人生を過ごしたファン・メーヘレンは、美術界に復讐をするために、贋作制作を始める。贋作をフェルメールの傑作と認めさせ、美術館にまで展示させた稀代の贋作師の生涯をたどる。

28. 『複製技術時代の芸術』

ヴァルター・ベンヤミン [著] / 佐々木基一 [編・解説] 1,900円 晶文社 1999年

その場所、その時間と連続することで礼拝的な価値をもっていた伝統的な芸術形式から、複製を前提することで展示的価値を高めるモダンな芸術形式への移行を礼賛する。複製技術の前提から芸術形式を分類する、グッドマンの一つ前の複製論。

29. 『著作権とは何か』

福井健策 [著] 740円 集英社新書 2005年

見た目が似ていれば即アウト？どれくらい違えばセーフ？今何かと問題となる著作権、この芸術と法が交差する地点では、著作物として保護されるのはどのような対象なのかという哲学的問題も議論される。

30. 『現代アートの哲学』

西村清和 [著] 2,800円 産業図書 1995年

グッドマンの問題提起を受けて、見た目がそっくりな二つの作品の美的な違いを、作品自体が持つ芸術史上の位置から説明する。真正性だけでなく、様々な美学の問題を実際の芸術作品に触れながら解説する格好の入門書。

31. 『伝奇集』

J.L.ポルヘス [著] / 鼓直 [訳] 780円 岩波文庫 1993年

フランスの詩人ピエール・メナールは、セルバンテスの『ドン・キホーテ』と同じテキストを持つのに、セルバンテスのものとは異なる自らの『ドン・キホーテ』を創造しようとする。できる……？優れた文学作品であるだけでなく、われわれに考察を迫る哲学的な思考実験でもある奇作。

32. 『ニュー・ミュージコロジー』

ジョゼフ・カーマンほか [著] / 福中冬子 [訳・解説] 3,200円 慶應義塾大学出版会 2013年

真正性が最も盛んに議論される舞台である音楽作品の演奏。作曲家の意図に忠実であるだけでよいのか、どこまで忠実でなければならないのか。グッドマンの存在論の批判論文と、真正性を意図から捉え直す論文を筆頭に、新しい音楽学の要点を学ぶ最新の論文集。

33. 『西洋音楽史再入門』

村田千尋 [著] 2,900円 春秋社 2016年

グッドマンが芸術形式を記号システムという観点から分析する際に、一つの基軸とした音楽作品の楽譜と記譜法。音楽と楽譜の関係からはじめて、楽器、人、社会と音楽との関係から記述された新しい音楽史。

34. 『美術手帖 2014年9月号 贋作ってなに？』 ※品切

美術手帖編集部 [編] 1,600円 美術出版社 2014年

35. 『偽りの来歴』

レニー・ソールズブリー、アリー・スジョ [著] / 中山ゆかり [訳] 2,600円 白水社 2011年

36. 『イメージ』

ジョン・バージャー [著] / 伊藤俊治 [訳] 1,300円 ちくま学芸文庫 2013年

37. 『シミュレーションイズム 増補版』

榎木野衣 [著] 1,300円 ちくま学芸文庫 2001年

38. 『シミュラクルとシミュレーション 新装版』

ジャン・ボードリヤール [著] / 竹原あき子 [訳] 2,900円 法政大学出版局 2008年

39. 『西洋美術研究 no.11 特集：オリジナリティと複製』

『西洋美術研究』編集委員会 [編] 2,900円 三元社 2004年

40. 『修復家だけが知る名画の真実』

吉村絵美留 [著] 750円 青春出版社 2004年

41. 『保存修復の技法と思想』

田口かおり [著] 4,800円 平凡社 2015年

42. 『その音楽の〈作者〉とは誰か』

増田聡 [著] 2,800円 みすず書房 2005年

43. 『美学への招待』

佐々木健一 [著] 780円 中公新書 2004

44. 『ありふれたものの変容 (仮題)』 ※未刊

アーサー・ダントー [著] / 松尾大 [訳] 慶應義塾大学出版会

45. 『芸術の作品 I 内在性と超越性』

ジェラルド・ジュネット [著] / 和泉涼一 [訳] 5,000円 水声社 2013年

46. 『文学的芸術作品 新装版』

ロマン・インガルデン [著] / 滝内禎雄 [訳] 5,900円 勁草書房 1998年

47. 『西洋音楽演奏史論序説版』

渡辺裕 [著] 4,500円 春秋社 2001年

48. 『記譜法の歴史』

カーリン・パウルスマイヤー [著] / 久保田慶一 [訳] 6,000円 春秋社 2015年

49. 『芸術としての身体』

デヴィッド・レヴィン [著] / 尼ヶ崎彬 [編訳] 3,000円 勁草書房 1988年

50. 『ルドルフ・ラバン』

ルドルフ・ラバン [著] / 日下四郎 [訳] 2,200円 大修館書店 2007年

岩切啓人 (いわきり・けいと)

東京藝術大学美術学部芸術学科卒業。東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻在籍 (美学芸術学/修士課程)。専門は美学・芸術哲学。特に、芸術作品の真正性の存在論研究。「複製不可能な芸術形式とその基準——新しい芸術への適用可能性」(学部卒業論文、東京藝術大学、2016年)。

3. 知覚・情動

源河 亨

知覚や思考はただ冷静に物事を把握する働きだが、情動は理屈抜きの直感的な反応である。そして、そうした理屈抜きの反応こそ経験を「美的なもの」にするのだ。こうした考えは一見正しそうにみえるかもしれませんが、グッドマンはそれを明確に拒否しています。グッドマンによると、情動は、知覚や思考によってもたらされた対象の把握を色づけして美的にするものではなく、知覚や思考と同じく、対象を捉える働きをする点で美的経験に貢献するものです。

情動は対象を捉える働きをもつという考えは、現代の哲学や心理学で一般的に受け入れられていると言っていいでしょう。視覚が色や形を捉えるように、情動は自分にとっての価値を捉えるものだと考えられています。たとえば、恐怖は自分の身に迫った危険な状況を、喜びは自分にとって好ましい状況が生じたことを捉えているのです。こうした「対象を捉える働き」は「志向性」とも呼ばれ、昔から哲学の中心的なテーマになっています。

知覚や情動は主に「心の哲学」という領域で研究されていますが、現在の心の哲学は、心に関する科学の知見に基づいて研究が行われています。むしろ、そうした科学を無視した研究は不可能になっていると言っていいでしょう。脳神経科学をはじめとする認知科学の目覚ましい発展に伴い、心の哲学でもそれに基づいて新しい見解が続々と提出されているのです。

以上を踏まえこのセクションは、なるべく新しい著作に絞って、知覚や情動に関する心の哲学、認知科学の著作を紹介します。とはいえ、以下に挙げた著作では、重要な古典の見解やスタンダードな学説も紹介されているので、知覚や情動に初めて興味をもった人でも安心して手に取ることができると思います。

★【知覚・情動】の参考文献

51. 『はらわたが煮えくりかえる』

ジェシー・プリンツ [著] / 源河亨 [訳] 4,000円 勁草書房 2016年

心理学・脳神経科学・文化人類学・生物学といったあらゆる知見を総動員し、情動の身体説と認知説を統合させる試み。美的・道徳的価値のヒューム的情動主義の再興にもつながる、現代の情動の哲学の基本書。

52. 『ヒトはなぜ笑うのか』

マシュー・ハーレーほか [著] / 片岡宏仁 [訳] 3,500円 勁草書房 2015年

ユーモア・おかしみ・笑いをテーマに、認知科学者・哲学者・心理学者が共同で執筆した著作。自説だけでなく、情動に関するさまざまなトピックや先行研究の概説も充実。例として使われるアメリカンジョークも満載。

53. 『アノスミア』

モリー・バーンバウム [著] / ニキリンコ [訳] 2,400円 勁草書房 2013年

交通事故が原因でアノスミア（嗅覚喪失）に陥った著者の日々のエッセイに、彼女がインタビューした研究者たちの見解が織り交ぜられ、嗅覚と感情の結びつき、脳の可塑性、障害の当事者性などについてテンポよく読める。

54. 『ぼくらが原子の集まりなら、なぜ痛みや悲しみを感ずるのだろうか』

鈴木貴之 [著] 3,000円 勁草書房 2015年

意識経験に備わる質的な特徴（クオリア）は、物理学的世界のなかに位置づけられるものなのか。「玉砕上等!」を掲げつつ、現代哲学最大の難問「意識のハード・プロブレム」に正面から挑む。国内の心の哲学の最重要著作。

55. 『知覚経験の生態学』

梁谷昌義 [著] 5,200円 勁草書房 2017年

J・J・ギブソンが創始した心理学のエコロジカル・アプローチとアフォーダンスの直接知覚説を詳細に説明しつつ、その哲学的な重要性をあますところなく捉える。徹底的な反表象主義を擁護する他に類をみない大胆な試み。

56. 『知覚と判断の境界線』

源河亨 [著] 3,400円 慶應義塾大学出版会 2017年

これ一冊あれば知覚の哲学の全貌がわかる! 近年復活を遂げた知覚の哲学の基本トピックを網羅的に紹介しつつ、心理学・認知科学・美学の知見も交え、応用問題として「見ることと考えることの境界線」を探る。

57. 『見てしまう人びと』

オリヴァー・サククス [著] / 大田直子 [訳] 2,300円 早川書房 2014年

2015年に亡くなった脳神経科学者・医者にして医学エッセイのベストセラー作家。シャルル・ボネ症候群をはじめ、ドラッグ体験、ドッベルゲンガー（自己像幻視）、幻聴、幻嗅など、多種多様な幻覚症例が登場する。

58. 『画像と知覚の哲学』

小熊正久・清塚邦彦 [編著] 2,900円 東信堂 2015年

59. 『恐怖の哲学』

戸田山和久 [著] 980円 NHK出版 2016年

60. 『コワイの認知科学』

日本認知科学会 [監修] / 川合伸幸 [著] 1,600円 新曜社 2016年

★【知覚・情動】の参考文献(つづき)

61. 『シリーズ 新・心の哲学Ⅰ 認知篇』

信原幸弘・太田紘史 [編] 3,000円 勁草書房 2014年

62. 『シリーズ 新・心の哲学Ⅱ 意識篇』

信原幸弘・太田紘史 [編] 3,200円 勁草書房 2014年

61. 『シリーズ 新・心の哲学Ⅲ 情動篇』

信原幸弘・太田紘史 [編] 2,800円 勁草書房 2014年

64. 『音楽と脳科学』

S.ケルシュ [著] / 佐藤正之 [編訳] 5,000円 北大路書房 2016年

65. 『美味しさの脳科学』

ゴードン・シェファード [著] / 小松淳子 [訳] 2,450円 インターシフト 2014年

66. 『触楽入門』

仲谷正史・寛康明ほか [著] 1,580円 朝日出版社 2016年

67. 『意識の諸相 上』

デイヴィッド・チャーマーズ [著] / 太田紘史・源河亨ほか [訳] 4,500円 春秋社 2016年

68. 『意識の諸相 下』

デイヴィッド・チャーマーズ [著] / 太田紘史・源河亨ほか [訳] 4,500円 春秋社 2016年

69. 『知覚の哲学入門』

ウィリアム・フィッシュ [著] / 山田圭一 [監訳] 3,000円 勁草書房 2014年

70. 『匂いの哲学』

シャンタル・ジャケ [著] / 岩崎陽子 [監訳] 3,200円 晃洋書房 2015年

源河 亨 (げんか・とある)

日本学術振興会特別研究員PD (東京大学) / 慶應義塾大学非常勤講師。博士 (哲学)。著作に『知覚と判断の境界線——「知覚の哲学」基本と応用』(慶應義塾大学出版会、2017年)。翻訳に、ジェシー・プリンツ『はらわたが煮えくりかえる——情動の身体知覚説』(勁草書房、2016年)、デイヴィッド・チャーマーズ『意識の諸相』(共訳、春秋社、2016年)など。

4. 芸術形式／芸術のメディア

高田敦史

絵画、音楽、文学、建築……etc.『芸術の言語』では、さまざまな芸術形式を記号システムと捉え、体系的に分析・比較します。おそらく、「芸術形式を記号システムと捉える」といった発想自体なじみのないものかもしれませんが——反対に、「古臭い記号論」といった連想を働かせる人もいるかもしれませんが——、これは要するに、絵画や音楽に特有の表示 (reference) や記号 (symbol) のあり方を明らかにするといった作業です。なお、この際、「表示」や「記号」という語はきわめて広義の「示すこと (示すもの) 全般」を包括する意味で用いられており、典型的な記号のイメージからは外れるようなものも含むという点には注意しておくべきでしょう。例えば、グッドマンの分析によれば、絵画による描写は、連続的な符号 (統語論的稠密性)、指示内容の連続性 (意味論的稠密性)、多様な要素の関連 (相対的充満) などの特徴をもつ記号システムと捉えられます (個々の特徴にはそれぞれ詳細な定義が与えられているため、詳しくは本書や巻末の用語解説を参照)。

こうした芸術形式の分析は、体系性の面でも、明確さの面でも、他に例がないものであり、現在でも十分に刺激的なものです。また、同じ「記号」という語を使っている、かつて記号論と呼ばれた分野とは、かなり異なった伝統に属するものです。むしろ形式論理を使った哲学的分析という分析哲学の伝統的テクニックを、芸術の領域に応用した成果と言えるかもしれません。

またグッドマンによる芸術形式の分析の特徴として他に、(1) 記号システムの特徴を、徹底して慣習的な取り決めとして捉える点、(2) 単に形式の分析にとどまらず、「美的なもの」のような価値的要素まで、記号システムの特徴によって説明しようとする点 (「芸術的認識と科学的認識」のセクションも参照) があります。これらは論争的なアイデアですが、現在でもなお真剣に検討されるべき興味深い論点です。

さらに『芸術の言語』が取り組んだ「芸術形式の比較と特徴づけ」という課題は、美学・芸術学・芸術批評の伝統的な課題のひとつでもあります。このため、グッドマンの分析を、さまざまな芸術形式・芸術メディアの特徴づけと比較しつつ読むことは興味深い課題となるでしょう。

なおグッドマン自身は使っていない語ですが、各芸術メディアに固有の本性は、

「メディアの特性 (medium specificity)」と呼ばれることもあります。また、グッドマン自身の議論は、規範的評価に対しては禁欲的ですが、メディアの特性を巡る議論は、規範的評価につながることも少なくありません。典型的には、(1) どのメディアがえらいかを競う、(2) メディアの特性を活かした作品を称賛するという議論はよくあるものです。この種の議論は、「Xという芸術形式(絵画、音楽、映画…etc.)の本性はYにある」「Yをもつ点で、Xは他の芸術形式より優れているのだ」「Yを活用した作品だけが素晴らしいのだ」という形で進みます(メディアの優劣を競う議論は、「パラゴネ」と呼ばれることもあります)。

こうしたメディアの特性を巡る議論は、「複数のメディアの優劣を決めることに本当に意味があるのか?」「メディアの特性に関わる要素だけが芸術的評価に関わるというのは本当だろうか?」といった点で疑わしいものです。しかし一方で、この種の議論が、芸術制作に何らかのヒントを与える可能性も否定できないでしょう。「メディアの特性を改めて問い直すことで、新しい作品群が生まれる」というのは、芸術史上何度も起きてきたことでもあります。こうした意味で、芸術形式・芸術メディアの特性を巡る議論は、芸術批評や美学にとどまらず、作品制作とも深いつながりのある分野でもあるのです。

★【芸術形式／芸術のメディア】の参考文献

71. 『ハーフリアル』

イエスパー・ユール【著】／松永伸司【訳】 3,500円 ニューゲームズオーダー 2016年

ビデオゲームはどんな芸術形式なのだろう？ビデオゲームを、ルールとフィクションという二つの側面から捉える人文系ビデオゲーム研究の古典。ビデオゲームという新しい芸術形式の位置づけを探る本書は、芸術形式の分析という点でも模範的な例になりえるだろう。

72. 『マンガと映画』

三輪健太郎【著】 4,200円 NTT出版 2014年

「マンガの本質は、コマの可変性と読みの自由度にある」といった素朴なマンガメディア称賛論を批判的に検討する好著。慣習から切り離された普遍的な「メディアの特性」からは距離をとり、特定の文脈と結びついた「スタイル」を重視する。

73. 『フィクションとは何か』

ケンダル・ウォルトン【著】／田村均【訳】 6,400円 名古屋大学出版会 2016年

フィクションの哲学の古典として知られる本書だが、実のところウォルトンの目標は、表象芸術全般を「フィクション」として分析することにある。絵画、文学、映画を一貫して、「想像」「虚構性」によって分析するウォルトンのメイクビリープ理論は、『芸術の言語』と双璧をなす、体系的な分析美学の芸術論となっている。

74. 『グリーンバーグ批評選集』

クレメント・グリーンバーグ【著】／藤枝晃雄【編訳】 2,800円 勁草書房 2005年

メディアの特性を巡る議論が、特定の芸術運動を後押しするという好例。グリーンバーグは、メディアの透明性を用いたリアリズムの絵画をイリュージョンとして否定し、抽象表現主義の擁護者となった。

75. 『文体練習』

レーモン・クノー【著】／松島征ほか【訳】 2,200円 水声社 2012年

76. 『コミック 文体練習』

マット・マドン【著】／大久保護【訳】 1,900円 国書刊行会 2006年

レーモン・クノーの『文体練習』は、同じ内容のシナリオを99の文体で表現する抱腹絶倒の実験作品。古今東西の文体はもちろん、中には「回路図」のような非言語的図式や、アナグラムのような非慣習的記号システムも登場する。本書は「同じ内容」を伝えるとはどういうことなのかという哲学的問いを投げかけるが、『芸術の言語』を読んだあなたは、本書を通して見えてくるものが「指示のシステム」と「例示のシステム」の区別であることに気がつくだろう。『コミック 文体練習』は同様の実験を、コミックという別のメディアで行なっている。

77. 『テツカ・イズ・デッド』

伊藤剛【著】 940円 星海社 2014年

グッドマンの議論を含め、画像の描写を巡る哲学で前提になっているのは、画像が何かを表す（示す・指示する）という側面だ。一方、本書で扱われているのは、キャラ絵そのものが独自の存在感を獲得した独立した対象になりえるのではないかという可能性だ。本書を題材に、画像とは区別された「キャラ」の記号システムを考えてみることもできるかもしれない。

78. 『文学の学び方』

レオン・タウンゼント・ディキンソン【著】／上野直蔵【訳】 2,300円 南雲堂 1982年

79. 『映画とは何か 上』

アンドレ・バザン【著】／野崎敏ほか【訳】 1,020円 岩波文庫 2015年

80. 『映画とは何か 下』

アンドレ・バザン【著】／野崎敏ほか【訳】 840円 岩波文庫 2015年

★【芸術形式／芸術のメディア】の参考文献(つづき)

81. 『文学理論講義』

ピーター・バリヤー [著] / 高橋和久 [監訳] 4,000円 ミネルヴァ書房 2014年

82. 『明るい部屋 新装版』

ロラン・バルト [著] / 花輪光 [訳] 2,800円 みすず書房 1997年

83. 『コンセプチュアル・アート』 ※品切

トニー・ゴドフリー [著] / 木幡和枝 [訳] 4,800円 岩波書店 2001年

84. 『フィルカル Vol.1 No.1 分析哲学と文化をつなぐ』

1,000円 ミュー 2016年

85. 『フィルカル Vol.1 No.2 分析哲学と文化をつなぐ』

1,000円 ミュー 2016年

86. 『フィルカル Vol.2 No.1 分析哲学と文化をつなぐ』

1,000円 ミュー 2017年

87. 『アリストテレス詩学／ホラティウス詩論』

アリストテレス、ホラティウス [著] / 松本仁助・岡道男 [訳] 920円 岩波文庫 1997年

88. 『ダンスの言語』

アン・ハッチンソンほか [著] / 森田玲子・酒向治子 [訳] 2,600円 大修館書店 2015年

89. 『音楽の基礎 改版』

芥川也寸志 [著] 740円 岩波新書 1971年

90. 『映画にとって音とはなにか』

ミシェル・シオン [著] / 川竹英克ほか [訳] 3,200円 勁草書房 1993年

91. 『漫画原論』 ※品切

四方田犬彦 [著] 1,200円 ちくま学芸文庫 1999年

高田敦史(たかだ・あつし)

会社員。専門はフィクションの哲学。論文に「図像的フィクショナルキャラクターの問題」(『Contemporary and Applied Philosophy』、2014-2015年)、「ストーリーはどのような存在者か」(『科学基礎論研究』、2017年)など。

researchmap: http://researchmap.jp/at_akada/

5. 芸術的認識と科学的認識

森 功次

科学と芸術との違いは、美や真理や感情や有用性といった点にあるのではない。両者の違いは〈その領域で働く記号の、どのような特徴が重視されているか〉という点にある——。グッドマンは『芸術の言語』第6章で、このように述べ、両者をどちらも記号システムとして捉えるという、独特の芸術観を打ち出しています。科学も芸術も、ある種の記号システムであるという点では違いはなく、ただそこでの記号の働き方や評価のされ方が違うだけなのだ、というのです。

この刺激的な主張は現代においても色褪せることなく、科学や芸術についての再考を私たちに迫りつづけています。芸術と科学との違いはいったいどこにあるのか。芸術がもたらしてくれる認識とはどのようなものなのか。そしてその認識は私たちの世界をどう変えてくれるのか。こうした問題は、単に科学技術を応用して芸術作品をつくったり、芸術を科学的に解明しようとしたりすることで答えられるものではありません。これは、科学と芸術それぞれについて直接考察することで、ようやくその答えのヒントが見えてくる問題なのです。

本セクションでは、そのヒントを与えてくれそうな書籍を選びました。分野のさまざまな書籍が並んでいますが、各専門家が「この営みは一体何なのか」と真摯に思考するさまは、どれも魅力的な知見に溢れています（そして、この知的刺激の快楽は、芸術と科学の違いをもたらすものではないのです）。上述のグッドマンの主張を念頭に置きつつ、これらの本を読んで欲しいと思います。そして、そのあとでもういちど『芸術の言語』の第6章を読み返すと、あらためてその主張の深さに驚くことでしょう。古典とはこのように、他の本を読むための参照軸を提示し、かつ、再読の驚きがあるものなのです。

★【芸術的認識と科学的認識】の参考文献

92. 『科学を語るとはどういうことか』

須藤靖・伊勢田哲治【著】 1,500円 河出書房新社 2013年

科学哲学なんて意味あるのか？本場の科学者が哲学者に率直に嘸みつき、科学哲学者が真摯に説明する。科学と哲学のすれちがいと、両者の姿勢を鮮やかに浮かび上がらせてくれる独特の良書。

93. 『レトリック感覚』

佐藤信夫【著】 1,100円 講談社学術文庫 1992年

通常とは異なる言葉づかいが、新しい思考を創造する。隠喩とは？誇張とは？日常の言葉づかいは実はレトリックにあふれている！『レトリック認識』『レトリックの記号論』へと続く、レトリック三部作の一冊目。

94. 『目の見えない人は世界をどう見ているのか』

伊藤亜紗【著】 760円 光文社新書 2015年

目の見えない人の世界認識はこんなところが違うのか！われわれが普段あたり前にしている肉体感覚の特性を、一風違ったアプローチでさわやかな驚きとともに届けてくれる書。

95. 『田中功起 質問する 2009-2013』 ※品切

田中功起・土屋誠一【著】 1,900円 アートイット 2013年

若手現代アーティストによる、学芸員や批評家との往復書簡記録。真摯な対話と巧みな言葉づかいは、一流のアーティストが一流の芸術哲学者でもありうることを教えてくれる。

96. 『デュシャンは語る』

マルセル・デュシャンほか【著】／岩佐鉄男・小林康夫【訳】 950円 ちくま学芸文庫 1999年

現代アートのださまざまな流派の元となる、アート界のビッグバンの存在、マルセル・デュシャンのインタビュー。素朴な発言の随所で光る洞察が心地よい。デュシャンに興味を持たれた方には、リストに挙げた平芳本もオススメ。

97. 『岩波 世界的美術 キュビズム』

ニール・コックス【著】／田中正之【訳】 4,800円 岩波書店 2003年

絵画はいかなる世界認識をもたらしうるのか。苦闘するキュビズムの歴史を、充実したカラー画像とともに。

98. 『芸術作品の根源』

ハイデッガー【著】／関口浩【訳】 1,300円 平凡社ライブラリー 2008年

芸術を真理の観点から論じた古典。思考枠組みも言葉づかひもオリジナルすぎて読者を選ぶが、刺さる人には刺さる奇書。

99. 『文学とは何か 改訳新装版』

サルトル【著】／加藤周一・白井健三郎・海老坂武【訳】 3,200円 人文書院 1998年

100. 『〈象徴形式〉としての遠近法学』 ※品切

エルヴィン・パノフスキー【著】／木田元【監訳】 1,000円 ちくま学芸文庫 2009年

101. 『人間 シンボルを操るもの』 ※品切

カッシーラー【著】／宮城音弥【訳】 1,100円 岩波文庫 1997年

102. 『思想 2016年4月号 特集：神経系人文学』

1,800円 岩波書店 2016年

103. 『国家 上 改版』

プラトン [著] / 藤沢令夫 [訳] 1,200 円 岩波文庫 2009 年

104. 『国家 下 改版』

プラトン [著] / 藤沢令夫 [訳] 1,200 円 岩波文庫 2008 年

105. 『マルセル・デュシャンとアメリカ』

平芳幸浩 [著] 3,400 円 ナカニシヤ出版 2016 年

106. 『恣意性の神話』

菅野盾樹 [著] 3,200 円 勁草書房 1999 年

107. 『美学』

バウムガルテン [著] / 松尾大 [訳] 1,900 円 講談社学術文庫 2016 年

108. 『科学哲学の冒険』

戸田山和久 [著] 1,120 円 NHK ブックス 2005 年

109. 『何が社会的に構成されるのか』 ※品切

イアン・ハッキング [著] / 出口康夫・久米暁 [訳] 3,600 円 岩波書店 2006 年

森 功次 (もり・のりひで)

東京大学教務補佐員 / 山形大学学術研究員、博士 (文学)。論文に「前期サルトルの芸術哲学——想像力・道徳・独自性」(博士論文、東京大学、2015年)。訳書にロバート・ステッカー『分析美学入門』(勁草書房、2013年)、ケンダル・ウォルトン「フィクションを怖がる」(『分析美学基本論文集』勁草書房、2015年)、同「芸術のカテゴリー」(電子出版物、2015年)。

【参考文献について】

1. 参考文献の中には、品切れ・絶版の作品も含まれます。
2. 現在入手できる作品であっても、在庫僅少の場合、短期間で品切れになってしまう可能性があります。

